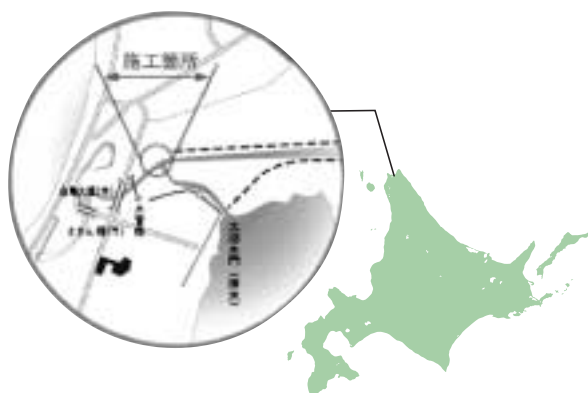


地域情報

声問川が生んだ 日本最北端のボートコース

伝統ある東北大学・北海道大学漕艇定期戦が、日本最北端の稚内市で今年7月に開催される。競技会場の稚内ボートコースは声問川であるという。稚内とボート競技？北海道でも意外な取り合わせに感じる人が多いのではないだろうか。そんな疑問を抱きながら、その背景と開催されるに至った経緯を探った。



稚内市は

日本最北端に位置する稚内市は、宗谷海峡をはさみ、東はオホーツク海、西は日本海に面し、宗谷岬からわずか43km先にサハリンを望む国境の街である。水産を中心に酪農・観光を基幹産業の三本柱として飛躍を続け、宗谷地方の行政、経済の中心地、北海道北部の中核都市として位置付けられ、また、近年はサハリンプロジェクトの進展などに伴い、ロシア連邦をはじめとする北方圏諸国への玄関口としても脚光を浴びている。

声問川改修工事

声問川（アイヌ語で「コイ・トイユ」(低い砂丘を) 波が打ち越えるところく永田地名

解) は、稚内市エタンパック山を源として、稚内市の酪農地帯である沼川・樺岡地区を縦貫し、稚内市声問市街部を通過して日本海に注ぐ、流路延長42km、流域面積300km²の北海道知事が管理する二級河川である。

大きく蛇行しながら平均標高5mという低湿地帯を流れる声問川は、河口に近い大沼に合流し日本海側に注いでいたため、潮位や大沼の水位の影響を受けやすく、洪水対策が大きな課題であった。このため、1953年に河口から中下流部沼川地区までの延長20.1kmの区間が、道知事に代わり北海道開発局が河川の改修、災害復旧などを行う「特殊河川」として採択され、本格的な工事が始まった。河川法の改正（1965年）に伴い「指定河川」として現在も工事を行っている。

工事は上流部沼川地区から中流部、下流部へと蛇行箇所^①の河道掘削と利用土による築堤を主体に順次工事が進められ、それらの概成後は水衝部の護岸を中心とした河道安定対策を行ってきた。現在は、防災対策面の他、動植物の生態系への配慮や市民の水辺利用の場ともなる親水機能を併せた河川整備などが進められている。

稚内漕艇協会と声問川ボートコース

1984年、東克彦北大ボート部長（当時、北海道漕艇協会会長）が来稚、浜森辰雄稚内市長との間で「水産都市稚内にボートを浮かべるなら応援しましょう」という話になり、翌'85年「ボートを通じての親睦、ボート人口の拡大、おおらかな力強い人を育てる」を目標に「稚内漕艇協会」（'99年から「稚内ボート協会」）が設立された。

当時、市立稚内病院副院長を勤めていた宮田睦彦さん（現札幌市保健福祉局勤務）が稚内市上空から声問川を見て、「直線コースも長いし、ボートコースとして最適ではないか」と発案、愛好者の協力で艇及び艇庫の確保やコースの測量等を行った。そして、声問漁業協同組合の協力を得て、声問川をコースとし、河口にあった丸共水産旧加工場を艇庫として借用することになった。

以来、「市民レガッタ大会」の開催、中学や高校への働きかけなど、市内のボート愛好者

づくりに熱心に取り組んでいる。その活動が実り、'88年には稚内高校に「ボート愛好会」が発足、今日まで全国大会、世界選手権出場などめざましい活躍が続けられている。また、この年から市民レガッタ大会に女子の部が新設されるなど、女性のボート愛好者も増えてきた。

このような状況を受け、より一層のボート愛好者拡大のため、稚内漕艇協会は稚内市とともに、漕艇競技場所の整備を北海道開発局稚内開発建設部に働きかけたという。

'93年に完成した声問川右岸白鳥大橋上流右岸護岸工事では、流下能力の不足している区間の河道を拡幅、これにより水面幅が40m、長さが2.4kmの直線区間を持つ河道、親水機能を併せた護岸整備が行われ、声問川漕艇コースは3コースとなった。

'98年には、北大ボート部や小樽桜陽、函館西高、道外から今治東、宇和島水産高校などが合宿に訪れるなど地域外からの利用者も増えた。

'99年には「北海道Eボート大会」が開催された。Eボートは、子どもから高齢者まで誰もが簡単に操作できる安全な10人乗りの手こぎボートで、初心者が気軽に参加して、自然豊かな川で遊ぶ楽しさを実感することでエコライフ（環境に配慮する生活）を楽しむことを意図したもので、交流ボート（Exchange Boat）の略。また、この大会では、サハリンからロシアチームの参加もあり、日露友好の人的交流にもなった。



2000年市民レガッタ大会



1999年北海道Eボート大会

日本最北の公認コース

1999年に声問川の流下能力を高めるための河川改修工事が行われ、総延長1,700mにわたり川幅は40mから50mに拡張された。この改修の際には、人々のレジャーやくつろぎの場所となる水辺の親水性に配慮、緩傾斜スロープの護岸構造を採用、それらと調和するよう水辺や周辺の景観にも工夫が凝らされ、高水敷及び護岸が整備された。

こういった整備のなかで、ボートなどの船揚場としても河岸が利用できるようになり、ボート競技やカヌーを観覧できるようになった。

また、これまで川幅が40mだったので、1レーン幅12.5m、水深2.5mで3レーン使用できる漕艇場だったが、川幅が50mに拡幅されたことにより、公式競技に必要な3レーンのほかにレースを終了したボートをスタート地点に戻すための4レーン目の設定が可能になり、日本ボート協会が定めるC級コースの規格に適合することになった。そこで、稚内漕艇協会は、日本ボート協会に公認コース認定を申請、'99年に声問川はC級コースに認定された。

ちなみに、(社)日本ボート協会のコース規定規格では、コースをA級（国際大会）6レーン以上、B級（全日本選手権各大会及び国民体育大会）5レーン以上、C級（その他の大会）3レーン以上としている。

全国のボート選手権の開催へ向けて

ボートの公式競技を行うコースの長さには、高校生競技1,000m、大学生競技2,000mが必要となる。茨戸川は1,000mのコースなので公式競技の利用としては、高校生競技だけである。また、大学生が練習として使用する際は、1,000mを茨戸川で行い、その後、伏古川へ移動して2,000mのコースを確保していた。声問川ボートコースがC級コースに認定されたことにより、北海道で唯一の直線2,000mの公式競技が開催できる漕艇コースとなったことは意義深い。

「今まで道内の日本ボート協会の公認コースは、網走湖、茨戸川の2つでしたが、声問川が認定されたことにより、これから全道大会などの開催、大学対抗戦や国体予選などの誘致、さらには合宿の誘致なども可能になり波及効果も期待できます。また、これが道北のボート愛好者の増加につながり、市民に活力を与えてくれます」と稚内ボート協会の柏谷仁副会長はいます。

今年、稚内ボート協会は創立20周年を迎える。その記念事業として第48回東北大学・北海道大学漕艇定期戦が、7月24日に声問川ボートコースで開催されることになった。また、定期戦終了後、両校は大学選手権に向けて稚内で強化合宿に入るとのことだ。

その定期戦を前に、北大ボート部の大沢晴美マネージャーに、このコースの魅力についてお聞きした。「茨戸川と比べ声問川は、直線2,000mの全国的にも珍しいコースです。風が多少強い日でも両岸が整備され水面には風が吹き込みにくい構造になっていて、風波の影響を受けにくく波も穏やかな素晴らしいコースです。そして、スタートからゴールまで橋架がないので、コース幅が狭くなる心配がありません。また、蛇行した部分がないので、イン・アウトのハンデもなく100%フェアな闘いができ、実力が試されるコースです。それに、ボートコースの周辺の河川景観も素晴らしく、大自然を身近に感じることでできる最適なコースです。これからもこの素晴らしいコースで定期戦が行われることを願っています」と語ってくれました。

市民と連携し、地域の自然環境をうまく活かした河川改修が、結果として最北の地稚内に公認のボートコースを誕生させ、歴史ある東北大学・北海道大学漕艇定期戦の誘致につながったわけですが、これを機に今後、全国のボート選手権大会や北海道予選会の開催に発展、最北のボートコースが地域のシンボルに発展していくことを期待したいものです。